

利用の是非

森 プルトニウム利用は、時間がかかり、取組んでいく、というのが私の考え。日本は、電力の三分の一は原発でまわっているが、そのうち、国内で生まれるプルトニウムの燃焼によるものが三分の一程度を占めている。つまり日本でもすでに電力の十分の一は、プルトニウムの燃焼でまわっているわけだ。ただ、核燃料サイクルは、プルトニウムを分離し、もう二度使おうというもので、それは反対の議論もあるが、原子力の役割を考えると、将来の日本と世界の原子力エネルギーを数十倍に使うリサイクルに取り組むことは大きな意味を持つ。何と、明日から全面的にもこの方向ではなく、からじくっていくような問題を解決しながらやっていくは良い。

高木 プルトニウム利用について、森さんは、プルトニウムが三分の一の扱いが難しい。これは分かるが、原子力発電をい、じゃあ分離しないで使うのであれば、プルトニウムは確実にできる。それを取り出したとたん、凶元の違う話になるのはおかしい。森 一久氏



森 一久氏

と取り出して燃やすというのは、やはり凶元の違う問題だ。原子力は科学的事実とともに、社会では、その議論を積み重ねていく必要がある。

森 一久

日本原子力産業会議専務理事



(大正15年)、広島中央公論社を経て、56年から業務で、和的な原子力利用推進法人日本原子力産業会議専務理事、78年から専務理事、力安全委員会の専門第五福竜丸平和協会、奈良県藤沢市在住。

リサイクルに意味 計画自体に危険性

高木

の大きな影響を与えるかも知れない。重要、この場合、原子力発電の燃料、プルトニウムを分離して使うと、まの未来では、大阪シンポジウム、大畑の問題が出てくる。ちゃんと、を閉じたのは、私たちが議論をやったことが、と同様、高木さんの努力も大変だ。

と取り出して燃やすというのは、やはり凶元の違う問題だ。原子力は科学的事実とともに、社会では、その議論を積み重ねていく必要がある。

が、もつといろいろな場をつつても良かったのではないかと、政府は、広い範囲の声を聞いて政策を立てるという態度が欠けていた。刺激を与えたという意味では、先日のシンポジウムはある程度の効果を上げたのではないかと、森 高木さんとも相談しているが、これから同様の催しをする方向で話を進めている。

森 大阪のシンポジウムのとき、「連立政権の影響が、なると言われたが、それは関係ない。政権交代の以前からシンポジウム実現の意思をしていた。

重大内容ではないと思う。経過から分かる。それすら表に出てこない。これまでの情報公開は、原子力推進行政を納得させるために情報を与えようという一方的なものだった。もつぱら役人が狭い範囲で選択しているから、もつと広い立場の責任のある機関が、どれを国民に知らせるのかという判断を受けて持ってきた、公表のルールと機関を、きちんと整備する時期に